

## 領域別項目対照表

大学院名: 筑波大学大学院

■科目番号と項目番号

研究科名: 人間総合科学研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: 石隈利紀

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 学校心理学

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	オリエンテーション、学校心理学とは	子どもが変わる・学校が変わる・社会が変わるなかで、学校生活の質を高める援助をどう行うか。学校心理学の定義と必要性について学ぶ。また学校心理士申請への過程について知る。	1-(1)	
2	世界の学校心理学と日本の学校心理学	アメリカ・イギリスの学校心理学、香港・台湾の学校心理学について知り、日本の学校心理学の歴史と現状について学ぶ。「スクールサイコロジスト」や「学校心理士」の現状と課題について知る。	1-(1)	
3	心理教育的援助サービスの基礎概念	援助サービスの対象(誰を援助するか)、援助サービスの焦点(何を援助するか)、援助サービスの場(どこで援助するか)について学ぶ。また4種類のヘルパーについて学ぶ。とくに教師の役割、スクールカウンセラーの役割について学ぶ。	1-(2)	
4	三段階の心理教育的援助サービス	三段階の心理教育的援助サービスのモデルについて学び、自らの援助について計画し、検討する。とくに一次的援助サービスが二次的・三次的援助サービスの基礎になり、二次的・三次的援助サービスで得た成果から一次的援助サービスを充実させるという循環を理解する。	1-(2)	
5	心理教育的アセスメント(1)	子ども(学習面、心理・社会面、進路面、健康面)、環境(学級、学校、家庭など)、子どもと環境の相互作用に焦点をあてて、アセスメントの方法(観察法、記録資料の読み方、関係者の面接など)について学ぶ。自分の価値観のアセスメントについても学ぶ。	1-(3)	
6	心理教育的アセスメント(2)	心理検査(WISC-III、K-ABCなど)による知的能力・学力の特徴のアセスメントについて学ぶ。心理検査実施および結果の解釈の留意点について、アラン・カウフマンの「賢いアセスメント」の視点から学ぶ。	1-(3)	
7	カウンセリング(直接的援助サービス)	授業、面接、個別指導など、直接的な援助サービスについて学ぶ。とくに教師のできる援助、スクールカウンセラーのできる援助に焦点をあてる。また寅さんとハマちゃんから、「カウンセリングにおける三種類の人間関係」モデルに基づく危機介入と日常生活における援助について学ぶ。	1-(3)	
8	コンサルテーション(間接的援助)とコーディネーション	援助者同士のコンサルテーションおよび援助サービスのコーディネーションについて学ぶ。とくに「コンサルテーション」および「相互コンサルテーション」の意義(「カウンセリング」との異同等)とプロセスについて学ぶ。またコーディネーターに求められるスキルについて学ぶ。	1-(4)	
9	チーム援助および援助サービスのシステム	援助チームの進め方、学校・地域における援助サービスのシステムについて学ぶ。とくに教師・スクールカウンセラーと保護者とのパートナーシップについて、チーム援助の演習を通して学ぶ。	1-(4)	
10	学校心理学の課題と心理教育的援助サービスにおける倫理	学校心理学の現状と課題について学ぶ。さらに心理教育的援助サービスを行う上での倫理について学ぶ。とくに援助サービスの質の維持向上と情報共有(守秘義務と報告義務)に焦点をあてる。	1-(5)	

※ なお、各授業時間は75分が2コマで150分。10回で2単位。

筑波大学大学院人間総合科学研究科（東京地区）

平成 22 年度 3 学期

## 学校心理学

(School Psychology)

授業時間：3 学期 土曜日 6・7 限

単位数：2 単位

履修年次：1 年～2 年

担当教官：石隈利紀 (ishikuma@human.tsukuba.ac.jp)

研究室：小日向校舎 304 (03-3942-5188)

オフィスアワー：金曜日 19:00～20:00 (アポイントを取ってください)

### 授業概要：

一人ひとりの子どもを対象とした心理教育的援助サービス（アセスメント、カウンセリング、コンサルテーション、コーディネーション）の理論と実践の体系である「学校心理学」について、講義、文献購読、実習から学習する。具体的には、現代の子どもがもつ学校生活での苦戦に対応した心理教育的援助サービスについて、実践例を通して検討する。また援助サービスのシステムやコーディネーターの役割について焦点をあてる。

\*「学校心理士」申請においては「学校心理学」に対応する。

### 評価方法：

3 点から評価する。

- ① 出席および振り返りレポートの提出（単位修得には 2/3 以上の出席が必要）
- ② 学期末レポート
- ③ 学期末試験（教科書および「A4 用紙 1 枚の“まとめ”」持ち込み可）

### 教科書：

石隈利紀 1999『学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス』 誠信書房

### 主な参考書：

- ◇石隈利紀・田村節子 2003『チーム援助入門—学校心理学・実践編』 図書文化
- ◇石隈利紀（監修）水野治久（編）2009 学校での効果的な援助～学校心理学の最前線  
ナカニシヤ書店
- ◇福沢周介・石隈利紀・小野瀬雅人（責任編集）日本学校心理学会（編）  
2005 学校心理学ハンドブック 教育出版
- ◇田上不二夫 1999 実践スクール・カウンセラー—学級担任ができる不登校児童・生徒への援助— 金子書房
- ◇大河原美以 2004 怒りをコントロールできない子の理解と援助—教師と親のかかわり  
金子書房
- ◇石隈利紀 2006 寅さんとハマちゃんに学ぶ助け方・助けられ方の心理学～  
やわらかく生きるための 6 つのレッスン 誠信書房

## 授業計画：

### 1 オリエンテーション、学校心理学とは：

子どもが変わる・学校が変わる・社会が変わるなかで、学校生活の質を高める援助をどう行うか。学校心理学の定義と必要性について学ぶ。また学校心理士申請への過程について知る。

### 2 世界の学校心理学と日本の学校心理学：

アメリカ・イギリスの学校心理学、香港・台湾の学校心理学について知り、日本の学校心理学の歴史と現状について学ぶ。「スクールサイコロジスト」や「学校心理士」の現状と課題について知る。

### 3 心理教育的援助サービスの基礎概念：

援助サービスの対象（誰を援助するか）、援助サービスの焦点（何を援助するか）、援助サービスの場（どこで援助するか）について学ぶ。また4種類のヘルパーについて学ぶ。とくに教師の役割、スクールカウンセラーの役割について学ぶ。

### 4 三段階の心理教育的援助サービス：

三段階の心理教育的援助サービスのモデルについて学び、自らの援助について計画し、検討する。とくに一次的援助サービスが二次的・三次的援助サービスの基盤になり、二次的・三次的援助サービスで得た成果から一次的援助サービスを充実させるという循環を理解する。

### 5 心理教育的アセスメント（1）：

子ども（学習面、心理・社会面、進路面、健康面）、環境（学級、学校、家庭など）、子どもと環境の相互作用に焦点をあてて、アセスメントの方法（観察法、記録書類の読み方、関係者の面接など）について学ぶ。自分の価値観のアセスメントについても学ぶ。

### 6 心理教育的アセスメント（2）：

心理検査（WISC-III、K-ABCなど）による知的能力・学力の特徴のアセスメントについて学ぶ。心理検査実施および結果の解釈の留意点について、アラン・カウフマンの「賢いアセスメント」の視点から学ぶ。

### 7 カウンセリング（直接的援助サービス）：

授業、面接、個別指導など、直接的な援助サービスについて学ぶ。とくに教師のできる援助、スクールカウンセラーのできる援助に焦点をあてる。また寅さんとハマちゃんから、「カウンセリングにおける三種類の人間関係」モデルに基づく危機介入と日常生活における援助について学ぶ。

### 8 コンサルテーション（間接的援助）とコーディネーション：

援助者同士のコンサルテーションおよび援助サービスのコーディネーションについて学ぶ。とくに「コンサルテーション」および「相互コンサルテーション」の意義（「カウンセリング」との異同等）とプロセスについて学ぶ。またコーディネーターに求められるスキルについて学ぶ。

### 9 チーム援助および援助サービスのシステム：

援助チームの進め方、学校・地域における援助サービスのシステムについて学ぶ。とくに教師・スクールカウンセラーと保護者とのパートナーシップについて、チーム援助の演習を通して学ぶ。

### 10 学校心理学の課題と心理教育的援助サービスにおける倫理：

学校心理学の現状と課題について学ぶ。さらに心理教育的援助サービスを行う上で倫理について学ぶ。とくに援助サービスの質の維持向上と情報の共有（守秘義務と報告義務）に焦点をあてる。

### 領域別項目対照表

大学院名: 鳴門教育大学大学院

科目番号と項目番号

研究科名: 学校教育研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: 小野瀬雅人・川上綾子

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 学習者理解・支援の実践と課題

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	イントロダクション	本授業の目的と進め方を理解し、学習の備えをつくる。		
2	事例分析の方法に関するガイダンス	実践事例の分析にあたり、事例分析や事例研究の考え方や考察の進め方、それらの結果に基づく学習者理解の具体的方法について学ぶ。	2-(1)	
3	教科学習にかかわる実践事例分析1(国語科・社会科の学習)	国語科・社会科の学習における児童・生徒理解の方法と課題を、国語科・社会科の授業研究事例を対象として、演習や実習を交えながら考察する。	2-(4)	
4	教科学習にかかわる実践事例分析2(算数数学科・理科の学習)	算数数学科・理科の学習における児童・生徒理解の方法と課題を、国語科・社会科の授業研究事例を対象として、演習や実習を交えながら考察する。	2-(4)	
5	教科学習にかかわる実践事例分析3(英語科、家庭科、技術・家庭科の学習)	英語科・その他の教科学習における児童・生徒理解の方法と課題を、国語科・社会科の授業研究事例を対象として、演習や実習を交えながら考察する。	2-(4)	
6	教科学習にかかわる実践事例分析4(音楽科、図画工作科、美術科、保健体育科等の学習)	音楽科・その他の教科学習における児童・生徒理解の方法と課題を、国語科・社会科の授業研究事例を対象として、演習や実習を交えながら考察する。	2-(4)	
7	教材開発・学習方略に関わる実践事例の分析	各教科や道徳等の教材開発・学習方略に関わる研究・開発事例を対象として取り上げ、演習や実習を交えながら考察するとともに、事例から今後の研究課題を明らかにする。	2-(4)	
8	学習環境に関わる実践事例の分析	学習環境に関する研究・開発事例を対象として取り上げ、演習や実習を交えながら考察するとともに、事例から今後の研究課題を明らかにする。	2-(4)	
9	学習意欲を高める(1)	児童生徒の学習意欲や動機づけを規定している要因について、自らの実践を振り返りつつグループに分かれて討議し、発表・意見交換を行う。	2-(3)	
10	学習意欲を高める(2)	学習意欲を高めるための個々の技法の背景となる理論的枠組みについて理解し、実践状の課題に照らしながら、児童生徒への具体的な働きかけについて考察する。	2-(3)	
11	思考活動を支援する(1)	人間の認知過程に関する研究事例から、学習者の思考活動を支援するための具体的な技法や実際の工夫点を知り、その有効性や課題について協議する。	2-(2)	
12	思考活動を支援する(2)	前時の講義内容に関わる実践事例を通して、授業において児童生徒の思考活動を支援するための具体的な技法や実際の工夫点を知り、その有効性や課題について協議する。	2-(2)	
13	思考活動を支援する(3)	前時、前々時の講義内容に基づき、思考活動の支援という観点から単元構成や授業における教材・課題等を構想し、発表・意見交換を行う。	2-(2)	
14	社会的相互作用を促す(1)	人間の学習に関する研究の歴史的変遷と現代における理論的・実践的課題を踏まえ、学習における社会的相互作用の機能とその重要性を理解する。	2-(5)	
15	社会的相互作用を促す(2)	研究事例・実践事例を通して、授業における子どもたちの社会的相互作用の機軸、それと学習の深まりとの関係について理解する。また、社会的相互作用を生かしたり促したりするためにはどうすればよいか、その手法や学習環境について討議し、整理する。	2-(5)	

※ シラバスを添付してください。



7	教材開発・学習方略に関わる実践事例の分析（演習・実習：小野瀬） 〔各教科や道徳等の教材開発・学習方略に関する研究・開発事例を対象として取り上げ、演習や実習を交えながら考察するとともに、事例から今後の研究課題を明らかにする。〕
8	学習環境に関わる実践事例の分析（演習・実習：小野瀬） 〔学習環境に関する研究・開発事例を対象として取り上げ、演習や実習を交えながら考察するとともに、事例から今後の研究課題を明らかにする。〕
9	学習意欲を高める（1）（演習：川上） 〔児童生徒の学習意欲や動機づけを規定している要因について、自らの実践を振り返りつつグループに分かれて討議し、発表・意見交換を行う。〕
10	学習意欲を高める（2）（講義・演習：川上） 〔学習意欲を高めるための個々の技法の背景となる理論的枠組みについて理解し、実践上の課題に照らしながら、児童生徒への具体的な働きかけについて考察する。〕
11	思考活動を支援する（1）（講義：川上） 〔人間の認知過程に関する研究事例から、学習者の思考や知識獲得における認知的特徴を理解し、それらと授業場面との関係について考察する。〕
12	思考活動を支援する（2）（講義・演習：川上） 〔前時の講義内容に関わる実践事例を通して、授業において児童生徒の思考活動を支援するための具体的な技法や実際の工夫点を知り、その有効性や課題について協議する。〕
13	思考活動を支援する（3）（演習：川上） 〔前時・前々時の講義内容に基づき、思考活動の支援という観点から単元構成や授業における教材・課題等を構想し、発表・意見交換を行う。〕
14	社会的相互作用を促す（1）（講義：川上） 〔人間の学習に関する研究の歴史的変遷と現代における理論的・実践的課題を踏まえ、学習における社会的相互作用の機能とその重要性を理解する。〕
15	社会的相互作用を促す（2）（講義・演習：川上） 〔研究事例・実践事例を通して、授業における子どもたちの社会的相互作用の様相、それと学習の深まりとの関係について理解する。また、社会的相互作用を生かしたり促したりするためにはどうすればよいか、その手法や学習環境について協議し、整理する。〕

【履修上の注意事項】

授業では、研究事例や実践事例の分析・検討にあたって受講生が事例をレポートにまとめ紹介したり、実践のシミュレーションや技法修得のための実習などが含まれるため、授業への積極的な参加を求める。

【成績評価方法】

出席回数ならびに事例紹介、レポート、実習等への参加の程度により行う。

【テキスト・参考文献】

前半では、現職教員による実践研究をテーマとした修士論文、その他、実践事例報告集等の利用を予定している。後半でも、とくに決まったテキストは用いず、毎時、必要な資料を配布し、参考文献についても授業の中で紹介する。

## 領域別項目対照表

大学院名: 群馬大学大学

■ 科目番号と項目番号

研究科名: 教育学研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: 霜田 浩信

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 発達心理学特論Ⅱ

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	イントロダクション	発達の理論、発達課題、発達査定を概観し、発達の視点からの事例理解をする大切さを学ぶ。	3-(1)	
2	発達心理学の意義	発達心理学の理論に基づき援助活動を行うことの意義を学ぶ。特に学齢期から青年期にかけての学校教育の問題への援助、発達障害児者への援助、悩みを抱える人への援助のあり方について考察する。	3-(1)	
3	認知の発達	乳児期の知覚、学習、記憶、および知能について学び、幼児期・児童期の知能とどのように関連しているかについて考察する。	3-(2)	
4	認知・思考の発達	論理的な思考の発達過程を学び、人の適応性、順応性、柔軟性について考察する。	3-(2)	
5	自我の発達1	幼児期から児童期にかけての自己意識形成から青年期における自我同一性の形成にいたる過程を学び、自尊感情や有能感の獲得、さらには周囲の人との価値観・規範との葛藤を考察する。	3-(3)	
6	自我の発達2	自我同一性の形成過程における拡散、早期完了、モラトリアムを学び、意志決定、有意義な選択について考察する。	3-(3)	
7	他者理解の発達	社会化の認知的基盤として、他者の心の理解を「心の理論」研究に基づいて学習し、他者とのやりとりや内的状態を表す言葉の発達を考察する。	3-(3)	
8	言語の発達1	言葉の発達過程を学び、コミュニケーション能力や思考力の発達との関係を考える。	3-(5)	
9	言語の発達2	音声言語発達・書記言語発達、および語彙の獲得、文法の獲得を学び、言語発達の援助方法について考察する。	3-(5)	
10	社会性の発達1	他者への気づき、共感の発達について学び、親や友達とのかかわりへ展開について考察する。また愛着の形成がもたらす社会性の発達への影響を学ぶ。	3-(4)	
11	社会性の発達2	幼児期の道徳性の発達、善悪判断の発達について学び、児童期における他者との関係性の築き方、社会的スキルの獲得について考察する。	3-(4)	
12	社会性の発達3	青年期から成人期にかけての脱中心化、役割取得の発達から普遍的な倫理原則に基づいた行動への展開について考察する。	3-(4)	
13	あそびの発達1	幼児期における思考・意欲の発達と遊びとの関連を学び、イメージを使った遊びの発展、友達との遊びへの展開、ルールのある遊びへの展開を考察する。	3-(4)	
14	あそびの発達2	学齢期における遊びの特性を学び、子ども達の集団構成と集団関係のあり方を考える。	3-(4)	
15	教育と発達	「教えること」と「育つこと」とは何かを考察する。	3-(1)	

※ シラバスを添付してください。

## 領域別項目対照表

大学院名: 東京\*\*大学大学院

■科目番号と項目番号

研究科名: 教育学研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: \*\*\*\*

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 臨床心理学特論(I)

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	臨床心理学の定義及びその課題	臨床心理学の歴史、考え方、対象、課題等について概括的な講義を行う。本講義全体のガイドも兼ねる。		
2	臨床心理学的アプローチ	精神分析的アプローチ、行動主義的アプローチ、人間性心理学的アプローチ等、臨床心理学の主だったアプローチについて解説する。	4-(3)	
3	子どもの発達と臨床的働きかけ	子どもへの臨床的働きかけと大人への働きかけの相違、発達の諸相と問題行動、問題行動理解の方法等について解説する。	4-(1)	
4	臨床的アセスメント(I)	発達と能力のアセスメント、心理アセスメントの歴史と発展、心理検査の実際等について事例に即して解説する。	4-(2)	
5	臨床的アセスメント(II)	行動とパーソナリティのアセスメント、行動観察、性格検査の実際、アセスメントの留意点などについて事例の即して解説する。	4-(2)	
6	臨床心理学の対象(I)	臨床心理学の対象を理解するための枠組みとしてのDSM-IVについて解説する。外面化する問題について解説する。	4-(2)	
7	臨床心理学の対象(II)	第6回目に引き続き、内面化する問題を中心に解説する。	4-(2)	
8	学校生活と臨床的働きかけ(I)	不登校・いじめ・緘黙など小・中学校に出現する問題を中心に解説する。	4-(4)	
9	学校生活と臨床的働きかけ(II)	校内暴力・学級崩壊、非行など小学校高学年から中学・高等学校に出現する問題を中心に解説する。	4-(4)	
10	スクールカウンセリング(I)	スクールカウンセラー制度について解説し、スクールカウンセラーの任務と学校における連携の仕方について考える。	4-(5)	
11	スクールカウンセリング(II)	学校を支援するさまざまなリソースについて考えるとともに、そうしたリソースとの連携の在り方について考える。	4-(5)	
12	臨床心理学の最近の動き(I)	第2回目の講義を発展させる形で、昨今、著しい展開を見せる認知行動療法について、その特徴について解説する。		
13	臨床心理学の最近の動き(II)	特別支援教育の実施に伴い、通常の学級での発達障害の問題への取り組みが求められており、この点について解説する。		
14	臨床心理学の最近の動き(III)	臨床心理学は問題が深刻になってからの「治療」的な意味合いがつかっていたが、予防的な観点から心の健康について解説する。		
15	臨床心理学の最近の動き(IV)	臨床心理学の最近の展開について、先進諸外国の昨今の状況について解説する。		

※ シラバスを添付してください。

## H22年度 東京\*\*大学大学院（修士課程）授業科目シラバス

科目名 : 臨床心理学特論 I

担当教員 : \*\*\*\*

対象学年 : 全学年

開講学期 : 秋学期

曜日・次元 : 月曜日・5 時限

### ねらいと目標 :

この授業では、臨床心理学の理論（アプローチ）、臨床心理学的アセスメント、対象とする問題、臨床心理学の学校での展開等について解説をしてゆく。こうした講義を通して、臨床心理学的な考え方、取り分け、学校場面での展開についての知見を広めることを目的としている。最後には、最近の動向として、認知行動療法、特別支援教育、健康心理学等についても解説をする。

### 内容 :

本講義では、以下の5つの内容について講義形式の授業を行ってゆく。すなわち、(1) 臨床心理学の歴史、基本的な考え方、臨床心理学的なアプローチについて。(2) 臨床心理学的アセスメントについて。(3) 臨床心理学の対象について。(4) 学校生活に関して現れる問題とスクールカウンセラーの任務について。(5) 最近の動向、の5つである。

### テキスト

特に使用しない。随時、関連する資料を配布する。

### 参考文献

その都度、紹介する。

### 成績評価

授業への出席状況、レポート等の提出状況、最終試験等を総合して評価する。

### 授業スケジュール

(1) 臨床心理学の定義と課題、(2) 臨床心理学的アプローチ、(3) 子どもの発達と臨床的働きかけ、(4) 臨床的アセスメント I、(5) 臨床的アセスメント II、(6) 臨床心理学の対象 I、(7) 臨床心理学の対象 II、(8) 学校生活と臨床的働きかけ I、(9) 学校生活と臨床的働きかけ II、(10) スクールカウンセリング I、(11) スクールカウンセリング II、(12) 臨床心理学の最近の動き I、(13) 臨床心理学の最近の動き II、(14) 臨床心理学の最近の動き III、(15) 臨床心理学の最近の動き IV

## 領域別項目対照表

大学院名: (あくまでも一つの参考例として作成)

## ■科目番号と項目番号

研究科名: (あくまでも一つの参考例として作成)

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: (作成者)石隈利紀

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 心理教育的アセスメント  
心理教育的アセスメント基礎実習

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	心理教育的アセスメントとは	心理教育的アセスメントの定義および心理教育的アセスメントの目的と基本的なプロセスについて学習する。とくに心理教育的アセスメントが援助サービスにおける援助者の意志決定の基盤となることを理解する。またカウンセマンの「賢いアセスメント」の考え方や、そしてアセスメントの倫理について学習する。	5-(1)	
2	心理教育的アセスメントの方法	子ども(学習面、心理・社会面、進路面、健康面)、環境(学級、学校、家庭など)、子どもと環境の相互作用に関する心理教育的アセスメントの方法について学習する。具体的には、行動観察、子どもの面接関係者との面接、記録・書類の検討、心理検査に関する方法と留意点について理解する。とくに、アセスメントの多様な方法を活用する意義について学習する。	5-(2)	
3	心理検査の活用	基本的な心理検査について理解し、活用するための基礎知識(各検査の目的・対象、限界)を獲得する。具体的には、知能検査・発達検査、学力検査、人格検査等について学習し、検査をバッテリーとして活用することを理解する。	5-(3)	
4	学級・学校のアセスメント	子どもの環境のアセスメントについて、具体的には学級集団・学級風土、そして学校における援助サービスの状況を把握する方法について学習する。学級集団のアセスメントに関しては、生徒の人間関係を把握する方法について理解し、学級経営の基礎的な知識とする。また学校のアセスメントは、校内の援助サービスに関する組織(コーディネーション委員会など)や援助資源について把握する方法を理解し、援助サービスのシステムづくりに関するコンサルテーションの基盤となる知識を獲得する。さらに子どもと環境の相互作用についてのアセスメントについても学習する。	5-(4)	
5	教育評価	児童生徒の状況や指導・援助の状況を把握し、教育の改善を検討する、教育評価の意義とプロセスについて学習する。診断的評価・形成的評価・総括的評価について理解するとともに、教育評価に関連する統計の基礎的知識を得る。	5-(5)	
6	日本版WISC-IIIの概要	知能検査の歴史を理解し、そのなかでWISC-IIIの理論的基盤および構成(言語性尺度、動作性尺度)について学習する。そして「標準化検査」において標準化手続きを遵守する意義について理解する。	実1-(1)	
7 8	言語性検査の実施と採点	6つの言語性の下位検査の実施と採点について実習を行う。とくに、採点の比較的難しい「類似」「単語」「理解」についてはよく練習する。	実1-(1)	
9 10	動作性検査の実施と採点	7つの動作性の下位検査の実施と採点について実習を行う。検査道具の使い方についても習熟する。	実1-(1)	
11 12	検査結果の解釈	全検査IQの解釈、言語性IQ-動作性IQの解釈、4つの群指数(言語理解、知覚統合、注意記憶、処理速度)による解釈、下位検査プロフィールによる解釈について、実習する。同時に、検査結果の信頼区間など統計的意味についても学習する。WISC-IIIの結果に、他の心理検査、検査中の行動観察、日常の観察(学校や家庭で)などの情報を加えて、総合的に結果の解釈を行うプロセスを体験する。	実1-(2)	
13 14 15	まとめ	WISC-IIIを核とする心理教育的アセスメントに基づき、子どもの個別の指導計画、教育支援計画における、具体的な指導案・援助案の提案について実習する。とくに、WISC-III等の結果の解釈と、発達心理学や特別支援教育など学校心理学に関連する知識を統合して、現実の教室場面や教師の使用できる援助サービスの提案をするプロセスについて理解する。さらに、検査結果、アセスメントの結果を子ども、保護者、教師にどう伝えるかについて学び、ケースレポートの作成について訓練を受ける。	実1-(3)	

※シラバスを添付してください。(今回は、上記の記述でシラバスに代えている)

## 領域別項目対照表

大学院名: 東京学芸大学大学院

■ 科目番号と項目番号

研究科名: 教育学研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: 大野精一

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 教育相談演習Ⅱ

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	学校教育相談—実践史から	日本の学校における教育相談実践史を総括する	6-(1)	
2	学校教育相談—類型化	学校教育相談実践史から学校教育相談を3つに類型化し、それらの特徴・特長を明確にする	6-(1)	
3	学校教育相談—これからの展望	学校教育相談の今後の課題や展望を明確にする	6-(1)	
4	各国比較から見た学校教育相談—香港・台湾	香港・台湾のスクールカウンセリング実践から日本の学校教育相談の特徴・特長を明確にする	6-(1)	
5	各国比較から見た学校教育相談—アメリカ	アメリカのスクールカウンセリング実践から日本の学校教育相談の特徴・特長を明確にする	6-(1)	
6	各国比較から見た学校教育相談—ヨーロッパ	ヨーロッパのスクールカウンセリング実践から日本の学校教育相談の特徴・特長を明確にする	6-(1)	
7	学校カウンセリングとは—学校教育相談の視点から	学校教育相談の視点から学校カウンセリング(コンサルテーションを含む)を機能的に考察する	6-(1)	
8	学校カウンセリング—カウンセリングの観点から	カウンセリングの観点から学校カウンセリングを機能的に考察する	6-(2)	
9	学校カウンセリング—コンサルテーションの観点から	コンサルテーションの観点から学校カウンセリングを機能的に考察する	6-(3)	
10	学校カウンセリング—コーディネーションの観点から	コーディネーションの観点から学校カウンセリングを機能的に考察する	6-(4)	
11	学校カウンセリング—基礎的な対応訓練としてのMLTその1	基礎的な対応訓練としてのMLTを実際に体験しながら学校カウンセリングを具体的に理解する(狭義のカ)	6-(2)	
12	学校カウンセリング—基礎的な対応訓練としてのMLTその2	基礎的な対応訓練としてのMLTを実際に体験しながら学校カウンセリングを具体的に理解する(コンサル)	6-(3)	
13	学校カウンセリング—実践上の諸問題	不登校やいじめ等の実践上の諸問題から学校カウンセリングの機能を明確にする	6-(5)	
14	学校教育相談体系化の視点—キューブモデルから	キューブモデルを中心に学校教育相談体系化の視点を明確にする	6-(1)	
15	全体のまとめ	学校教育相談の暫定的な全体像を歴史的・理論的・各国比較的に提示する	6-(1)	

※ シラバスを添付してください。

## H22年度大学院(修士課程)授業科目シラバス

科目名	教育相談演習Ⅱ(a)
担当教員	大野 精一
対象学年	1年
講義室	
開講学期	後期
曜日・時限	金曜日・3時限
ねらいと目標	この授業は、日本における学校教育現場の教師(教諭・養護教諭)を中核とする教育相談実践(学校教育相談School Counseling Services by Teachers in Japan)を理論的・歴史的そして各国比較的に整理し、学校教育相談の体系を演習形式で提示することをねらいとする「教育相談演習」の後半である。ここでの目標は、(1)学校教育相談の実践史をまとめ、そして(2)アメリカやヨーロッパ、東アジア等の各国で展開されているスクールカウンセリングと比較し、(3)中心機能としての学校カウンセリングの内実を明らかにすることによって、学校教育相談の体系を把握することを目標とする。
内容	主として4つの内容につき、講義と必要な文献購読を中心に授業を進めるが、随時グループによる議論やロールプレイング、事例研究等を行う。(1)学校教育相談の実践や研究に関わる文献を輪番制で講読・報告し、実践や研究の類型化を中心に議論をする。(2)日本と同型の「学校教育相談」実践が展開している香港・台湾等の東アジアや欧米のスクールカウンセリングの実践や研究についてレポートや議論、補足的な講義を行い、日本の学校教育相談の独自性や限界を明確にする。(3)中核機能としての学校カウンセリングをカウンセリング、コンサルテーション、コーディネーションの3つに区分してそれぞれの意義やスキル等を実践的に把握することで、学校教育相談の独自のあり方を確認する。(4)各受講者がそれぞれに学校教育相談の体系性を主体的に把握できるようにするため個別的な課題を設定・遂行しそれを発表する。
テキスト	大野精一 学校教育相談—理論化の試み ほんの森出版 1996; 大野精一 学校教育相談—具体化の試み ほんの森出版 1997
参考文献	その都度事前に指示し、その一部は著作権等法令を順守した上で、Web-site <a href="http://schoolcounseling.cocolog-nifty.com/">http://schoolcounseling.cocolog-nifty.com/</a> から入手できるように準備している。
成績評価方法	出席回数や課題・レポート、発表内容・受講態度などを中心として総合的に判断するが、「演習」であるので出席回数や積極的な受講態度も重要な評価対象とする。
授業スケジュール(展開計画)	(1)学校教育相談—実践史から (2)学校教育相談—類型化 (3)学校教育相談—これからの展望 (4)各国比較から見た学校教育相談—香港・台湾 (5)各国比較から見た学校教育相談—アメリカ (6)各国比較から見た学校教育相談—ヨーロッパ (7)学校カウンセリングとは—学校教育相談の視点から (8)学校カウンセリング—カウンセリングの観点から (9)学校カウンセリング—コンサルテーションの観点から (10)学校カウンセリング—コーディネーションの観点から (11)学校カウンセリング—基礎的な対応訓練としてのMLTその1 (12)学校カウンセリング—基礎的な対応訓練としてのMLTその2 (13)学校カウンセリング—実践上の諸問題 (14)学校教育相談体系化の視点—キューブモデルから (15)全体のまとめ
授業のキーワード	学校教育相談 カウンセリング コンサルテーション コーディネーション ASCA 指導教師 MLT キューブモデル
受講補足(履修制限等)	教育相談演習Ⅰを合わせて受講することが望ましい
その他	この授業は、学会連合資格「学校心理士」認定運営機構が定めた『学校心理士資格取得のための大学院における関連科目(履修内容)の新基準』の「7. 学校カウンセリング」も参照して、構成されている。

## 領域別項目対照表

大学院名: 東京学芸大学

■科目番号と項目番号

研究科名: 教育学研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: 橋本 創一

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 発達臨床特論E

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	特別支援教育について	オリエンテーション[授業概説] (特別支援教育の理念と実践) (臨床発達心理学の基礎について)	7-(1)	
2	発達支援を必要としている人々(支援ニーズ・発達障害児の特性)	発達支援を必要とする子どもや発達障害児の特性について	7-(2)	
3	発達障害児の実態	通常学級の教室のなかでの気になる子どもや発達障害児の姿 (あらゆる障害について、特別な教育ニーズ)		
4	実態把握(対象理解の方法)	気づき・発見と理解(スクリーニング、実態把握、認知発達支援や行動支援のニーズ)	7-(3)	
5	特別支援教育の制度	特別支援教育とは (教育制度と支援システムについて)	7-(2)	
6	校内委員会と支援体制	校内支援体制 (具体的な支援のあり方)	7-(5)	
7	特別支援教育における連携	専門機関と学校の連携 (医学的診断や福祉機関からの支援)		
8	個別の教育支援計画	担任教師と特別支援教育コーディネーター・個別の支援計画	7-(4)	
9	発達支援ニーズのある就学前期の実態と支援	就学前期の発達障害児の姿と発達支援 (認知発達と行動支援について)		
10	青年期・成人期の発達障害者の実態	青年期・成人期の姿と不応症候		
11	学習支援・発達支援の方法	教室における具体的な支援 (認知発達に基づく学習支援と行動支援など)		
12	発達支援(社会性の支援を中心に)	ソーシャルスキルトレーニングの実際		
13	相談支援	教育相談の進め方と保護者の協力 (親のタイプに応じた支援など)	7-(3)	
14	学級における支援(集団への支援方法)	学級経営と理解教育 (要支援児を含めた学級風土づくりと経営など)		
15	支援者の専門性と役割	総括 (心理・教育などの支援者の専門性と役割)		

※ シラバスを添付してください。

“変更予定なし”



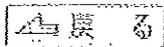
タイトル「2010年度 教育学研究科シラバス」、フォルダ「2010年度 教育学研究科シラバスー学校心理専攻」シラバスの詳細は以下となります。

9

## 目 次

科目名	発達臨床特論E(a)		
担当教員	橋本 創一		
対象学年	1年	クラス	01
講義室		開講学期	秋学期
曜日・時限	月6	単位区分	選択
授業形態	一般講義	単位数	2
受講対象	学校心理専攻学校心理コース、学校心理専攻臨床心理コース		
備考			
ねらいと目標	通常学級に在籍する特別な教育的ニーズ(主に軽度知的障害、発達障害)のある幼児・児童・生徒などを対象として、教育支援・発達支援、カウンセリングなどにおける今日的な課題・トピックをとりあげながら、臨床発達心理学の基礎を学ぶ。		
内容	内容は、学校現場における気になる子どもや発達障害の障害特性、実態(アスペルガー症候群、LD、ADHD、高機能自閉症、軽度知的障害)、通常教育の教育課程と個に応じた支援/個別の指導計画、通常学級の中の障害児の発見・対応、保護者とのカウンセリングと連携、軽度発達障害者の就労・生活支援、学校カウンセリング、教育相談、専門機関・専門家のコンサルテーションと学校の連携、障害児理解教育と障害児教育理解、学級経営、発達障害児へのソーシャルスキルトレーニングである。特に、子どもの認知発達とその障害や援助の方法について事例などをあげて概説する。 こうした発達支援を必要とする対象を通して、臨床発達心理学とその具体的な支援方法、心理職・教育職としての専門性などを学ぶ。		
テキスト	[教師のための学校カウンセリング(小林・橋本・松尾編著)、2008年、有斐閣] 講義中にプリントを配布する。		
参考文献	『認知発達とその支援(ミネルヴァ書房)』『学校心理士による心理教育的援助サービス(北大路書房)』、その他は授業中に配布または指示する。		
成績評価方法	出席状況、討議、レポートによって総合的に評価する。		
	回	内容	
	1	オリエンテーション[授業概説] (特別支援教育の理念と実践) (臨床発達心理学の基礎について)	
	2	発達支援を必要とする子どもや発達障害児の特性について	
	3	通常学級の教室のなかでの気になる子どもや 発達障害児の姿 (あらゆる障害について、特別な教育ニーズ)	
	4	気づき・発見と理解(スクリーニング、実態把握、認知発達支援や行動支援のニーズ)	
	5	特別支援教育とは	

授業スケジュール(展開計画)		(教育制度と支援システムについて)
	6	校内支援体制と個別の指導計画 (具体的な支援のあり方)
	7	専門機関と学校の連携 (医学的診断や福祉機関からの支援)
	8	担任教師と特別支援教育コーディネーター (支援者の役割と仕事内容など)
	9	就学前期の発達障害児の姿と発達支援 (認知発達と行動支援について)
	10	青年期・成人期の姿と不応症状
	11	教室における具体的な支援 (認知発達に基づく学習支援と行動支援など)
	12	ソーシャルスキルトレーニングの実際
	13	教育相談の進め方と保護者の協力 (親のタイプに応じた支援など)
	14	学級経営と理解教育 (要支援児を含めた学級風土づくりと経営など)
	15	総括 (心理・教育などの支援者の専門性と役割)
授業のキーワード	臨床心理学, 特別支援教育, 児童理解, 心理検査, 福祉, 面接法, アセスメント, 発達障害	
受講補足(履修制限等)	講義は、教育実践研究支援センター2号館(グランド入口門前)の1階会議室でおこなう。	
その他	学校心理士取得の「障害児の教育と心理(H22)」、臨床発達心理士取得の「臨床発達心理学の基礎(H22)」を想定しています	



## 領域別項目対照表

大学院名: 東京学芸大学大学院

■科目番号と項目番号

研究科名: 教育学研究科

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: 大野精一

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 教育相談演習 I

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	教育相談と生徒指導、キャリア教育	三者の構造・連関を明確にする	8-(3)	
2	生徒指導とは何か—教育相談との関連で	教育相談との関連で生徒指導の定義・内容等を明確にする	8-(1)	
3	生徒指導の体制と諸問題—事例から考える	不登校やいじめ等の事例を通して生徒指導の体制や、そこで生じる諸問題を考察する	8-(2)	
4	キャリア教育の意義と内容—教育相談との関連で	教育相談との関連でキャリア教育の意義と内容を明確にする	8-(4)	
5	キャリア教育の意義と内容—キャリア概念の展開	キャリア概念の理論的・実践的な展開からキャリア教育の意義と内容を明確にする	8-(4)	
6	キャリア教育の意義と内容—代表的な研究者の業績と事例研究への応用	代表的なキャリア研究者の業績と、その事例への応用によりキャリア教育の意義と内容を明確にする	8-(4)	
7	キャリア教育の具体的な展開—キャリア発達プログラムの検討	代表的なキャリア発達プログラムの検討を通してキャリア教育の具体的な展開を考察する	8-(5)	
8	学校教育相談と臨床心理学—その異同	学校教育相談と臨床心理学との異同を明確にする	8-(3)	
9	学校教育相談と臨床心理学—学校教育相談の意義と特質を考える	学校教育相談と臨床心理学との異同を通して学校教育相談の意義と特質を考察する	8-(3)	
10	学校教育相談と学校心理学—その異同	学校教育相談と学校心理学との異同を明確にする	8-(3)	
11	学校教育相談と学校心理学—学校教育相談の意義と特質を考える	学校教育相談と学校心理学との異同を通して学校教育相談の意義と特質を考察する	8-(3)	
12	学校教育相談とカウンセリング心理学—その異同	学校教育相談とカウンセリング心理学との異同を明確にする	8-(3)	
13	学校教育相談とカウンセリング心理学—学校教育相談の意義と特質を考える	学校教育相談とカウンセリング心理学との異同を通して学校教育相談の意義と特質を考察する	8-(3)	
14	学校教育相談の定義	学校教育相談の暫定的な定義を示すことで学校教育相談の全体的な体系を展望する	8-(3)	
15	全体のまとめ	全体のまとめを行う	8-(3)	

※ シラバスを添付してください。

## H22年度大学院(修士課程)授業科目シラバス

科目名	教育相談演習Ⅰ(a)
担当教員	大野 精一
対象学年	1年
講義室	集団実験室
開講学期	前期
曜日・時限	金曜日・3時限
ねらいと目標	この授業は、日本における学校教育現場の教師(教諭・養護教諭)を中核とする教育相談実践(学校教育相談School Counseling Services by Teachers in Japan)を理論的・歴史的そして各国比較的に整理し、学校教育相談の体系を演習形式で明確にすることをねらいとする「教育相談演習」の前半である。ここでの目標は、(1)教育相談を広く生徒指導やキャリア教育等の教育活動と関連させ、そして(2)カウンセリング心理学や臨床心理学、学校心理学等との異同を検討することで、学校教育相談の特質(定義)を理解することを目標にしている。
内容	主として3つの内容につき、講義と必要な文献購読を中心に授業を進めるが、随時グループによる議論やロールプレイング、事例研究等を行う。1)生徒指導やキャリア教育に関する実践や研究、臨床心理学・学校心理学・カウンセリング心理学等の関連文献を輪番制で講読・報告し、その異同を中心に議論をする。2)学校教育相談の特質についてレポートや議論、補足的な講義を行い、学校教育相談の全体像を明確にする。3)各受講者がそれぞれに学校教育相談の特質を主体的に把握できるようにするため個別的な課題を設定・遂行しそれを発表する。
テキスト	大野精一 学校教育相談—理論化の試み ほんの森出版 1996; 大野精一 学校教育相談—具体化の試み ほんの森出版 1997
参考文献	その都度事前に指示し、その一部は著作権等法令を順守した上で、Web-site <a href="http://schoolcounseling.cocolog-nifty.com/">http://schoolcounseling.cocolog-nifty.com/</a> から入手できるように準備している。
成績評価方法	出席回数や課題・レポート、発表内容・受講態度などを中心として総合的に判断するが、「演習」であるので出席回数や積極的な受講態度も重要な評価対象とする。
授業スケジュール(展開計画)	(1)教育相談と生徒指導、キャリア教育 (2)生徒指導とは何か—教育相談との関連で (3)生徒指導の体制と諸問題—事例から考える (4)キャリア教育の意義と内容—教育相談との関連で (5)キャリア教育の意義と内容—キャリア概念の展開 (6)キャリア教育の意義と内容—代表的な研究者の業績と事例研究への応用 (7)キャリア教育の具体的な展開—キャリア発達プログラムの検討 (8)学校教育相談と臨床心理学—その異同 (9)学校教育相談と臨床心理学—学校教育相談の意義と特質を考える (10)学校教育相談と学校心理学—その異同 (11)学校教育相談と学校心理学—学校教育相談の意義と特質を考える (12)学校教育相談とカウンセリング心理学—その異同 (13)学校教育相談とカウンセリング心理学—学校教育相談の意義と特質を考える (14)学校教育相談の定義 (15)全体のまとめ
授業のキーワード	学校教育相談 生徒指導 キャリア教育 カウンセリング心理学
受講補足(履修制限等)	教育相談演習Ⅱを合わせて受講することが望ましい
その他	この授業は、学会連合資格「学校心理士」認定運営機構が定めた「『学校心理士資格』取得のための大学院における関連科目(履修内容)の新基準」の「8. 生徒指導・教育相談、キャリア教育」も参照して、構成されている。

## 領域別項目対照表

大学院名: (あくまでも一つの参考例として作成)

## ■科目番号と項目番号

研究科名: (あくまでも一つの参考例として作成)

別紙「科目番号と項目番号」を参照し、下表の科目番号項目番号欄に記入してください。

担当者名: (作成者) 大野精一

記入例 1-(1)、実1-(1)

科目名: 学校カウンセリング・コンサルテーション基礎  
実習

No.	授業スケジュール	主な内容	科目番号 項目番号	(認定委員会記入欄)
1	MLT演習第1セッション1	MLTの説明とMLT演習 フィードバックは かかわりづくりに関わる内容を中心課題と する	実2-(1)	
2	MLT演習第1セッション2	同上	同上	
3	MLT演習第1セッション3	同上	同上	
4	MLT演習第2セッション1	MLT演習 フィードバックは傾聴に関わる 内容を中心課題とする	実2-(2)	
5	MLT演習第2セッション2	同上	同上	
6	MLT演習第2セッション3	同上	同上	
7	MLT演習第3セッション1	MLT演習 フィードバックはコンサルテー ションやコーディネーション等に関わる総 合的な内容を中心課題とする	実2-(3)	
8	MLT演習第3セッション2	同上	同上	
9	MLT演習第3セッション3	同上	同上	
10	総括的なまとめ	カウンセリング・プロセスやカウンセリング・ コンサルテーション・コーディネーション等 の自己評価を含んだ総括を行う	同上	

学校カウンセリング・コンサルテーションを効果的に行うための三つの基礎的な条件(①相手を理解できる、②自分の意図を実現できる、③相手と自分の関係をモニタリングできる)を実習により学習し、実際場面の中で実現できるようにする。本授業では、小林純一教授考案のMLT((a new micro-laboratory training 新マイクロ・ラボラトリー・トレーニング)で実習を行う。参加者(24名を想定)を三つのグループに均等に分ける。この各々のグループが、以下説明する三つの役割を交代しながら取って、一巡していくことになる。こうして各役割で取得・体験できた能力を第一の役割に生かしていく。第一の役割は、テーマは何でもよいから相互に知り合うようにして自由に話し合うことである。思い切って、わかり、わかり合うようにする。このことにより、他者と積極的にかかわり、人間的な信頼関係を形成していくという学校カウンセリング・コンサルテーションの核心を体験的に学ぶことになるのである。第二の役割は、第一の役割を取っているグループの中から一人を選び、その人をよく見て、話すことをよく聞き、その人が何を話したか、どんな気持ちを感じながら話しているか、どのように変化していったかがあるがままに観察することである。このことによって他者を集中的にわかる訓練をする。第三の役割は、第一の役割を取っているグループの中にどんな雰囲気が流れているか、また、このグループの人達は何をしているのか、全体として何が起きているのか、どう変化しているのか、こうしたプロセスをあるがままに観察することである。このことによって、面接時の自己モニターリングの力量をつけることになる。こうした各役割が円滑に取れるようにするため、参加者は、二重円になって椅子に座る。内側には第一の役割を取るグループが、外側には第二・三の役割を取るグループが座る。その際、第二・三役割グループは交互に座る。また第二役割グループの中での並び方は、自分の観察する第一役割グループの人がよく見える位置に各自座ることになる。具体的な各回の進行は各一回ごと90分で、先ず第一役割グループが10分弱話し合う。これをうけて、第一・二役割グループの各観察者・被観察者が話し合い、自分の観察が正確であったか確かめる。これによって第一役割グループの各人をよりよくわかるようにする(40分)。次いで、第三役割グループに属する人が一人ずつ自分の観察したことを、全体に向けて報告する(10分)。以上をうけて、再度、第一役割グループが20分弱話し合う。その際、第二・三役割グループに答える感じで、自由に話し合い、自分や自分たちは何を話したか、など相互にわかりあうようにする。これが終わった段階で、さらに全員で質問や確かめてみたいことを自由に出し合う。最後の10分間で、感想および今の自分の感情を評価する。この後、役割を交代して同じく2回続けていく。これで参加者は各役割をすべて体験することになる。これを1セッションとすると、さらにグループメンバーを変えて2セッション行う。なお、各セッションの話等は、参加者相互だけのものである(秘密保持の原則)。最終セッションで総括的なまとめを行う。

※シラバスを添付してください。(今回は、上記の記述でシラバスに代えている)